

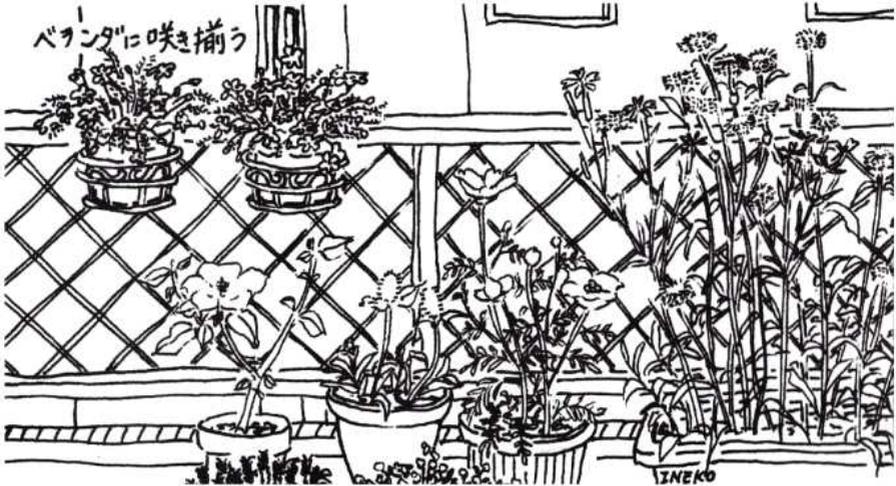
2006年 6月15日発行（隔月刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2006年6月
第 56 号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

Normal、Normalize、 Normalization（2）（岡田健嗣）	1
最も同音異義語が多い言語（佐竹秀雄）	7
点字から識字までの距離（52） みどり学級へのサービス（1）（山内 薫）	11
酔夢亭読書日記（16）（酔夢亭）	14
『横浜漢点字羽化の会』に参加してみた（中野志野）	16
ケニアでのこと（賀川友吉）	18
図書館納入書の紹介	20
漢文のページ	25
ご報告とご案内	27
編集後記（木下和久）	29



Normal Normalize Normalization (2)

岡田 健嗣

一 (承前)

拙論を進めるに当たって、その前提となる立場、あるいは考え方を確認しておきたい。既に幾度か触れた事柄であるが、左の二点である。私たちの生活の中で常態になっているところにもう一度メスを入れて、その分析の認識を共有することは無駄ではないと考える。

a (識字) と (識字率)

我が国の (識字率) は九九・八%だという。この数値は昭和三十年代に既に達成されていたと私は記憶している。当時はまだ (識字) という語はあまり聞かれなかった。「文盲」が生きていて、「文盲撲滅」などという物騒な言い方もスローガンとして使用されていた。しかしこれは我が国のことではなく、武力を放棄して文化国家となったとする日本が、後進国 (現在の発展途上国) をその文化で支援しようとするときに使用したものである。

私は昭和二十四年の生まれで、戦後直ぐに生まれた世代、いわゆる「団塊の世代」に属している。そんな私たちにとって「文盲」は、決して切実ではなかった。他人事であった。私たち (視覚障害者) と「文盲」が深く関わっていると捉えていた人は、(漢点字) の創案者である川上先生を除いてはいなかったのではないだろうか。ずっと後になって、それが全くの勘違いで、私たち日本の視覚障害者こそが「文盲」なのであって、何も手を下されずにそのまま放置されているのだということに気付かされたのであった。社会へ出てから気付かされる、既に遅しであった。

我が国の (識字率) の九九・八%という数値は、どのように算出されたのであるのか? 総務省・統計課に尋ねて見た。その答えは、「国民の内の十五歳以上の人口に占める、初等教育修了者の割合」とのことだった。つまり (識字) という語から来る印象とは異なつて、(文字) が読めるかどうかということを問うて、その割合を求めたものではないのである。初等教育を終了しておれば、当然そこで習った (文字) は読めるはず・書けるはずだとするのが、この (識字率) の算法だったのである。そして戦後の (識字率) が九九・八%に至ったのは、義務教育の就学率がそのような数値になったことによるのであって、(文字) が読め

るか・書けるかということ、直接には問うていなかったのである。

ところで私の曾祖母は、明治十年の生まれで、昭和三十六年に没している。私たちの年代は、このような世代の人との接点もある。この接点は、私に多くを教えてくれた。

徳川時代の我が国男子の〈識字率〉は、思いの外高いものだったという。武士階級は人口の一割で、百姓が八割、残りが商工業者であったという。そして武士を除いた百姓・町人の男子は、六割が読み書きが出来たという。武士を加えれば、男子の〈識字率〉は七〇％に達していたのである。

何故にこのように高い数値であったか、当時の人は既に「〈文字〉の力は侮れない」ことに気付いていて、競って民間の教育機関である「寺子屋」に子弟を通わせたのである。また幕府の統治も、「高札」を掲げるなど〈文字〉を使用しての伝達を方法とした。そのため〈文字〉の習得を奨励して、読み書きの出来る者を優遇したのであった。

明治に入ると我が国も、列強との国際関係の真っ直中に放り込まれる。国際的な競争に勝ち抜かなければならない。そのためには近隣の国々との関係を、他の列強に先んじて優位なものにしなければならぬ。

「富国強兵」である。

政府は欧米に多くの使節を派遣して、列強各国がどのようにして富を蓄え、国力を強化して来たかをつぶさに見聞した。その結果として、「民意の向上」こそが最も重要で、そのためには、早急に公教育の制度を確立しなければならぬとして、初等教育四年の義務化を打ち出した。

しかしここで大事なことを見落としてはならない。ここで言う「義務教育」の対象には、「女性」と「障害者」は含まれていないのである。「女子と不具者は、他人の邪魔にならないようにしていればよろしい、それが国への奉公だ」というのである。

先に紹介した私の曾祖母は、ひらがな・カタカナは知っていたが、〈漢字〉を使いこなすことはなかった。庶民の女兒が小学校に通うようになるのは、もつとずっと後のことである。〈文字〉は、児童のうちに学習されるのが最も効率がよい。自転車の乗り方や泳ぎ方の習得と同じである。成人してからの学習は、大変困難なのである。まして当時の女性には、そんな時間はない。曾祖母を思い出すと、やはり〈文字〉を知らないままであることを、引け目に感じていたようだ。しかも〈文字〉を知らないことを、世間では、自らの責任として負わされていたようだった。このような女性たち、明治初頭までに生まれた庶民の女性た

ちは、「文盲」のまま一生を終えた。(識字率)九九・八%とは、このような女性たちが死に絶えることで達成された数値だとも言えるのである。このことに私も、遅まきながら気が付かされた。

さて、「文盲」の女性たちは死んだ、それによつて我が国の(識字率)は一〇〇%に限りなく近づいているように見える。彼の女性たちは蘇らないからである。

そこでもう一人の「文盲者」である視覚障害者はどうか(？)、「富国強兵には役立たないし、(漢字)は難しいから習得する必要はあるまい」、こうして(日本語点字)に(漢字)の体系が作られなかったのだが、戦後の教育制度だけは近代化して、身体障害者の教育にも、「義務教育」が取り入れられた。私が盲学校に在学しているころは、初等教育の課程に、若いも若きも、学齢とは関係なく多くの視覚障害者が通っていた。しかし何故か、(漢字)の教育には、手が付けられないまま現在に至っているのである。

「文盲」の女性たちは死んだ。しかし視覚障害者は、人口に一定の割合で生まれて来る。事故や疾病や高齢化で、その数はさらに増える。にもかかわらず教育の現場では、重い腰を上げる気配はない。

b. 歴史は繰り返す、ルイ・ブライユと漢点字

現在世界中で使用されている(点字)は、いうまでもなく一八二五年にフランス人の視覚障害者「ルイ・ブライユ」によつて創案されたものから発展したものである。我が国で使用されているカナ点字の(日本語点字)も、例外ではない。勿論(漢点字)も例外ではない。

ブライユは一八〇九年にパリ郊外に生まれたという。父は馬具職人で、幼少のころ父の使用する工具で遊んでいて、目を突いて失明したと伝えられる。

ブライユが(点字)の原型を発表したのが一八二五年であったのだから、十六歳の時である。別表にブライユの創案した(点字)の符号の組み立てを掲げることが、ご覧のように、現在既に使用している者から見れば、極めてたわいないものに見える。縦三つ・横二列の六つの点を、端から組み合わせただけの、六三通りの点の組み合わせである。その組み合わせに、さらに端からアルファベットを当てはめたのである。

それまでは普通の文字を木板に浮き彫りにしたものを触読して、文字と文を習得していた。しかし視覚障害者にとって普通の文字の触読は、大変苦痛を伴っていた。文字一つ一つを判読するのがせいぜいで、文を

読みこなすなどとても出来るものではなかったからである。

そんな苦しみの中ブライユは、当時陸軍が夜間用の暗号として開発していた触読用の符号の存在を知って、それからヒントを得て、六つの点で表す〈点字〉に辿り着いたのであった。これで文章の解読も容易に出来る。ブライユの周辺の視覚障害者は、大いに喜び、大いに使用したという。しかしフランス一国の中でも、その普及は遅々として進まなかった。

ルイ・ブライユの点字符号一覧

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	A	B	C	D	E	F	G	H	I
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
2	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
3	U	V	X	Y	Z				
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
4									W
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
5									
51	52	53	54	55	56				
6									
57	58	59	60	61	62	63			
7									

ENGLISH BRAILLE, American Edition
American Printing House for the Blind Louisville, Kentucky, 1977

ブライユは一八五二年に亡くなっている。肺結核だったという。生前には〈点字〉の普及はなかった。しかしブライユを慕う人々は、普及しない〈点字〉を惜しみ、フランスばかりでなく、イギリス、ドイツへと、普及の輪を広げて行ったのであった。

ここまでは点字図書館や盲学校へ行けば、何処でも聞くことが出来る話である。私もこれ以上は知らない。ただ、ブライユの生前に何故〈点字〉が普及しなかったのかという点だけが疑問として残るばかりである。

言われていることは、視覚障害者の教育に携わっていた教育者の賛同が得られなかったところにその理由があるとのことである。〈点字〉はその構成の単純さから、とても〈文字〉とは認められない。〈文字〉は、須く、視覚に訴える形を有していなければならぬ、というのである。「読めるか読めないかは努力次第、楽をしてはいけない」、そういうのであった。だがそういう教育者たちは、晴眼者であるだけで、触読の苦しみを味わう必要はなかった。その苦しみを免れている人たちから、「楽をするな、努力を惜しむな」と言われる、そのようにして〈点字〉の普及は進まなかったのであった。

「歴史は繰り返す、一度目は悲劇として、二度目は……」。現在〈漢点字〉の普及が進まないと言われているのも、どうやらブライユの味わったところと酷似した状況が現出しているからようだ。盲学校の晴眼の先生方の口から出る言葉に、「〈漢点字〉が普及しないのは、〈漢点字〉自身に欠陥があるからではないか？ 難し過ぎるからではないか？」、「〈漢字〉は形が大事なので、〈漢点字〉は〈文字〉とは言えない。単なる代替文字だ。」、「今の子供たちには勉強しなければならぬことが沢山あって、〈漢点字〉の勉強に時間を割くのは無理だ」。如何にブライユが当時のフランスの盲教育に当たっていた晴眼の教師等から言われたことに似ていることか！

このようにして、教育の現場から排除された状態、これが〈漢点字〉の置かれている現在の状況だと言っても言い過ぎではないと思う。

【補遺】

① 〈識字〉は英語の“Literacy”の訳語である。日本語の「〈識字〉」という語は、「文字を知っていること」という語感しか与えない。広辞苑等の国語辞典にも、「文字の読み書きができること」としか記されていない。しかし英語の“Literacy”には、「文字を知る」では言い切れない意味を含んでいる。「文章の素

養、文学的な知識や教養に富むこと。文章の読み書きをする能力のあること。」といった意味を表す言葉である。日本語の〈識字〉とはかなりの隔たりがありそうだ。それはともかく、「〈識字〉は基本的人権である」とは議論の余地のないところと思う。明治初頭に起こった「女子の教育運動」のようなものは、視覚障害者には縁のないものであろうか？

② 〈義務教育〉は英語の“compulsory education”の訳語である。この“compulsory”という語は、“compulsory military service”（徴兵）の語にも含まれる語で、「法の力で、強制的に…する」という意味を表す。明治初頭には、「強制教育」が訳語として用いられたこともあるという。従ってここでいう〈義務〉とは、かつては〈国民〉の〈国家〉に対して負った〈義務〉という意味で用いられていた。現在では、とりわけ国連の「子供の権利宣言」以後、〈国家〉や〈地方行政〉、その他社会のあらゆる機関の、〈子供〉に対して負うべき〈義務〉と位置付けられるようになってきた。しかし我が国では、広辞苑等国語辞典にあるように、〈親〉等の子供の〈保護者〉が〈子供〉に対して負う〈義務〉と定義されるのが普通で、〈社会〉が負う〈義務〉という発想は、ごく稀薄に見える。

③前回使用した「視覚障害者の置かれている保管状況」という語句は、「非識字」や職業分野の制限によって、視覚障害者は極めて狭い社会環境に生活せざるを得ず、さらに公務員や教員に就いている視覚障害者は、その仕事の対象が、またその地域に生活する視覚障害者であること、決して一般の不特定な人々を対象とする職域ではないことによって、狭隘なコミュニケーションを形作らざるを得ないということを言ったものである。狭隘なコミュニケーションとその内側に顔を向けた職業人、しかも皆「非識字者」であるという実態を、「保管状況」と呼んでみた。

④ルイ・ブライユは、縦三点・横二列を単位とした「点字」を編み出した。一見極めて単純なものではあるが、「創案」となれば、並々ならぬ天才的な発想力を要したことは想像に難くない。

ブライユの「点字」は、点の組み合わせ二の六乗個、六四通り（フリーを含む）でアルファベットを表すことから始まった。後に英、独に普及が及んで、各国語特有の発音や単語にマッチした「略字」が考案されて、触読の便宜に大いに寄与した。この「略字」の構成は、独語では二マス、英語では三マスまで使用している。

「漢点字」の創案者の川上泰一先生は、ブライユがアルファベットを「点字符号」に当てはめたように、「漢字」の「部首」を「点字符号」に当てはめられないかと検討された。当用漢字（現在の常用漢字に当たる）は二千字に足りない。「漢点字」の通常の構成を二マスと仮定すれば、点の組み合わせは二の十二乗個、四〇九六通り（フリーを含む）である。つまり当用漢字の数は充分クリア出来る、それ以上は三マスで表せばよろしい、そう心に決められた。

別表のように「漢点字」の基本構成は、「文字」の部分は一マス六点、最も頻繁に使用する常用漢字はほぼ二マスで表される。「漢点字」と「カナ点字」を区別するために、文字符号の上に二つの点を加えることにして、「漢点字」の一マスは、八点ということになった。

漢点字の基本パターン

1 マス	2 マス	3 マス
⠠	⠠⠠	⠠⠠⠠

（続く）

「左の論考は、佐竹秀雄先生の著された『最も同音異義語が多い言語』（月刊「言語」一九九八年五月号、大修館書店）を転載させていただくものです。佐竹先生並びに大修館書店様には、そのご快諾に深く御礼申し上げます。

最も同音異義語が

多い言語



佐竹秀雄

（さたけひでお／計量国語学）

佐竹秀雄先生…武庫川女子大学言語文化研究所長（文学部教授）。以前、国立国語研究所に勤務。現代語の表記論、文章論、言語行動論を専門。現代のことばづかいの分析をテーマ。日本人のための日本語教育をめざす。（ウェブサイトより）

先生はこの論考で、《結局、同音衝突が問題になるのは、音声によって表示される話しことばの場合と、書きことばが表音文字によって記されているときである。しかし、日本語の表記は、漢字という表語（表意）文字を使っており、同音異義語は問題にならない。（中略）つまり、漢字の使用が、同音異義語を生

み出し、かつ、その存在を支えているのである。》と結んでおられます。

本会の活動は、視覚障害者に〈漢字〉を習得する機会を開くことを目的としますが、その論拠を証して下さったものと受け止めております。ご精読下さい。

最も同音異義語が多い言語は日本語である。と断言して間違いないという保証は、実はない。世界中のあらゆる言語と比較したわけではない。したがって、厳密に言えば、断言はできないのであるが、一般に、日本語には同音異義語が多いと考えられていることは事実である。

以下、そう考えられる状況的証拠、あるいは、同音異義語が多い理由について考察する。

○同音異義語の多さ

日本語に同音異義語はどれくらいあるのだろうか。石井正彦（一九九一）には、国立国語研究所が行った高校教科書（理科・社会科）調査における同音語の比率が、整理して紹介されている。それによれば、同音語は、形態素（M単位）レベルでは、使用された語彙の異なり語数の三五・一％、単語（W単位）レベルでは、同じく七・四％にあたるという。

同音語の比率は、形態素を基準にするか単語を基準

にするかで、ずいぶんと大きく異なる。形態素の場合に比率が高いのは、単語の場合より語形が短く、同音語になる可能性が高いからである。

また、同音語の多寡を問題にする際に、もう一点注意すべきことがあり、それは、同音語をどのように定義するかによって結果が異なるという事実である。

石井（一九九一）では、同音語と認められるケースとして

A 代表形も変異形式も同音（「雨」と「飴」）

B 代表形は同音でも変異形式に同音でないものがある（「寝る」と「練る」、「篩」と「古い」）

C 代表形は同音ではないが変異形式に同音のものがある（「雨」と「編む」）の三つのパターンを挙げ、一般には、A、Bを同音語とすることが多いと述べている。ただし、Aだけを同音語と認める立場や、A、B、Cのすべてを同音語と認める立場もありうる。その立場次第で、同音語の量も当然変わってくる。先の形態素レベルの三五・一%、単語レベルの七・四%というのは、A、B、Cのいずれをも同音語として扱っている場合の数値である。

ついでながら、同音語というとき、右の「雨」と「飴」という和語の例が示されていることからわかるように、同音の「音」は音訓の「オン」ではなく、読み「おと」の意である。

また、「雨」と「飴」の場合も該当するが、「言語」と「原語」、「役者」と「訳者」のように、アクセントによって意味が識別される場合でも、同音語として扱われる。つまり、アクセントの違いは無視されている。ただ、田中章夫（一九九一）によれば、アクセントで判別しうる同音語は多くないという。もつとも、アクセントの違いを無視する考え方を拡大して、中国語の四声の違いを無視するならば、中国語が最も同音意義語が多い言語になるだろうが、今はそこまで広げない。

語を同音語の量の問題に戻すが、中野洋（一九八九）には、国語辞典での同音語の比率が紹介されている。『新明解国語辞典』（第二版、三省堂）のデータで、三六・六%が同音語だという（横山晶一「1987」による）。この場合は、親見出しを対象としている。したがって、動詞は終止形が見出しに立っている。先のCのようなパターンは含まれていないはずだから、一般の同音意義語の意識に近いものである。その値が三六・六%であるから、大ざっぱな言い方をすれば、国語辞典に採録されるような語彙においては、その約三分の一の語が同音異義語だということになる。

○同音異義語と多義語の関係

右に紹介したデータでは、いずれも同音語という言葉をしていて、同音異義語とは言っていない。しかし、もちろん別語を意味しており、同音異義語と同じと考えてよい。ただ、異義であるか否かにはあまり重点を置いていない。この点について議論を始めると、同音異義語の定義上の問題が生じてきて、その結果、同音異義語の多さも変わってこよう。

たとえば、「刺す／指す／差す／射す／挿す／注す／鎖す」の場合、それぞれが同音異義語なのか、それとも多義語「さす」の別表記形なのか。これらは、本来、「対象物がある領域から別の領域内に向かうようにする」という意味をもった同一語であった。それが、その「対象物」と「領域」の違いによって、さまざまな意味に分化してきた。そのために、もはや同一語とは思えない。

同一語であれば多義語であるが、現在の多くの国語辞典では、これらをいくつかの別語として扱っている。たとえば、先の『新明解国語辞典』を例にとれば、「刺す（挿す）」、「指す」「差す（射す・注す・鎖す）」と、三つの別見出しとして分けられている。

このほか、「泣く／鳴く」「冷める／覚める」「治める・修める・納める・収める」「計る／量る／測る／図る／謀る／諮る」などの同訓異字の使い分けが認

められる場合は、どこまでを同一語とし、どこから別語とみなすかについては、確固たる境界は必ずしも存在しない。その判定基準は、現在における意味分化に対する意識でしかない。

したがって、こうした語を、多義語として同一語に判定すれば、同音異義語の量は減るが、逆に別語意識が高まれば、当然同音異義語が増加する。そして、歴史に見たとき、同訓異字の使い分けを通して、本来の同一語に対して別語意識が育ってきたことは衆知の事実であり、その結果、同音異義語は増加してきたと考えられる。

なお、これらの例とは逆に、別語を多義語扱いにしている場合もないではない。たとえば、「偲ぶ」と「忍ぶ」で、これらは歴史的には別語であったとされる。そして、現在でも、意味の差が認められるが、国語辞典によつては、一つの親見出しのもとに記述している、すなわち同一語として扱っているものもある。ただし、この類いの例は少ないし、別語扱いとしている国語辞典のほうが多い。結局、多義語との関係で見ると、全体に、多義語としてよりも同音異義語として認められる傾向があるようだ。

○同音異義語を支えるもの

同音異義語は、同音衝突をもたらし、情報の伝達を

さまたげるものである。にもかかわらず、先に見てきたように、日本語には同音異義語が多い。なぜそのように多数の同音異義語の存在が許されているのであるか。

中野（一九八九）と石井（一九九一）では、高校教科書に使用された語彙における、語種別の同音語の比率が調査されている。それによると、先の三つのパターンA、B、Cのすべてを同音語と認める立場では、和語のほうが多いが、Aのパターンのみを同音語とする立場では、漢語のほうが圧倒的に同音語の比率が高いという。また、田中（一九九一）では、「まぎれやすい同音語の多くが字音語である」ことが指摘されている。つまり、一般に典型的な同音異義語が多いと認識されるのは、漢語の世界なのである。

ところで、漢語が展開されるのは書きことばの世界であり、話しことばの世界では、漢語は中心的な存在ではない。書きことばでは、同音異義語が多数出現するが、そこでは、文字、特に漢字によって、その意味が識別されるので、同音衝突の現象は生じない。それに対して、話しことばでは、和語が中心であり、漢語に多い同音異義語はかわりが少なく、困るような同音衝突は分量的に限られる。同音衝突で誤解が生じるような場合は、たとえば「試案、試みの案が：」のように、同音異義語に注釈を付けて述べることなどで解

消がはかられたりする。

さらに、日本の社会には「書いたものがものを言う」ような、書きことば優位のところがある。確実な情報伝達は、書きことばで行おうとする。書きことばが中心にある限り、同音異義語の存在は、何の障害もないものとして許容される。結局、同音衝突が問題になるのは、音声によって表示される話しことばの場合と、書きことばが表音文字によって記されているときである。しかし、日本語の表記は、漢字という表語（表意）文字を使っており、同音異義語は問題にならない。また、先にも見たように、同訓異字の場合、漢字を使っているからこそ、意味の分化が進み、同音異義語が増えてきたのである。つまり、漢字の使用が、同音異義語を生み出し、かつ、その存在を支えているのである。

【図】同音語の割合（異なり）（中野 一九八九）
新明解国語辞典… 同音語三六・六％、非同音語六三・三％、（全体異なり七二・七四七語）

高校教科書… 同音語三五・三％、非同音語六四・六％、（全体異なり一五・六〇八語）

【注】このデータは、中野（一九八九）による本稿の図と同じ資料によるが、整理の仕方が違うため、数値は若干異なっている。

【文献】

横山晶一（一九八七）「電子化辞書に基づく日本語の計算言語学的研究」『電子技術研究所研究報告』、八八一号

中野洋（一九八九）「高校教科書の同音語」『高校・中学校教科書の語彙調査―分析編』国立国語研究所報告九九

田中章夫（一九九一）「同音語の問題点」『日本語学』一〇巻一号

石井正彦（一九九一）「同音語の諸相」『日本語学』一〇巻一号



点字から識字までの距離(五二)

みどり学級へのサービス(一)

〜みどり学級でのサービスの開始〜

山内 薫（墨田区立緑図書館）

緑図書館から歩いて三分程のところ、緑小学校がある。緑小学校は明治四五年に創立された古い学校で、もうじき九五周年を迎える。緑図書館とも古くから縁があり、昭和二九年五月十一日、緑小学校内の一階に

寺島図書館緑分館ができて開館した。記録によるとこの分館は午後二時から午後九時までまで開館していたという。その後昭和三十二年の十一月十五日、緑図書館が独立館として建設されたために、緑分館は緑小学校から移転した。この緑小学校に「みどり学級」という心身障害学級がある。区内には六つの小学校に知的障害学級があり「みどり学級」もその内の一つである。

緑図書館とみどり学級の関わりは三年前にさかのぼる。緑図書館では隔月で『情報誌みどり』というA3版裏表印刷の館報を発行していた。その第九号、二〇〇三年二月号で「学校と図書館との連携」を特集し、学校と関わる「図書館見学」「出張おはなし会」「団体貸出」などを紹介した。この内「出張おはなし会」は近隣の小学校のクラスに向いて絵本を読んだり、紙芝居をやったり、パネルシアターなどをすると共にブックトーク（本の紹介）を行うもので、とても好評を博している。現在は出張ブックトークと称して行っており、昨年度などは近隣の五つの学校の延べ六四学級に向いて実施している。『情報誌みどり』第九号では三人の先生方に数行の感想も寄せて頂いた。

この情報誌を見て、みどり学級でも出張お話し会を



やってもらいたいと担任のT先生が図書館を訪れた。そこでまず、みどり学級を見学させて頂くことにした。四月に訪問したその時間は丁度、専科の先生がやってきて音楽の授業を行っているところだった。クラスには四人の子供たちがいたが、その内K君という三年生の男の子は今年みどり学級に編入してきたばかりで、椅子に座っていることができず、教室内を歩き回ったり、教室の外に出て行ったりしていた。他の五年生二人と二年生一人の女の子は椅子に座って音楽の授業を受けており、教室の前に置かれているドラムセットを使ってピアノに合わせてリズムを取る課題などが行われていた。私たち訪問した三人の職員も授業に参加させてもらい、ピアノに合わせて太鼓やシンバルを叩いたりした。T先生と相談の結果、毎週木曜日の朝が学校全体の「読書の時間」に当てられているので、月一回第二木曜日の朝九時からの一時限目に訪問して紙芝居などを行うことになった。

翌、五月の第二木曜日、八日がいよいよ第一回のみどり学級訪問日だった。その日の出し物は「せんたくかあちゃん」の大型絵本、絵本「どうながのプレッツェル」、「はらぺこあおむし」の大型絵本などを読み、その後でトイレットペーパーの芯の円筒を使って

作ったこいのぼり三尾を揚げながら「こいのぼり」の歌をみんなで唄った。(写真のように、三つの筒の二カ所に糸を通し左右の糸を交互に引くと円筒のこいのぼりが徐々に上に揚がっていく仕掛けのこいのぼり) 第1回訪問の時、K君は初めの内は席に座っていたが、絵本には見向きもせず、分厚い『イミダス』のページをめくりながら、開いたページの一文目の文字を



左右の糸を交互に引くと上に揚がるこいのぼり

指で押さえながら声に出して読んでいた。実は昨年度、別の学校の2年生のクラスで出張おはなし会を行った際に、一人だけ席を立っていて、どうも落ち着いてお話しを聞けない男の子がおり、名前を覚えていたのだが、その子がK君で、この4月からみどり学級に編入してきたことが分かった。「こいのぼり」の歌が始まる頃には席に着いていることができず、外に出て行ってしまい、担任のT先生が外で相手をしていたように記憶している。

六月の二回目の訪問の時には、やはり大型絵本の『そらまめくんのベット』を読んだが、担任のT先生がK君の手を取って前に出て、大きな絵の中のそら豆を指で指して押さえるように導いた。その結果K君も少しは絵本に興味を示したようだった。七月の第三回目の訪問には、たまたま近くの中学校の生徒六人の職場体験学習があり、一緒にみどり学級に行つて、大型紙芝居などをやつてもらつた。またピアノが弾ける中学生がいたのでピアノ伴奏で「かたつむり」の歌を唄いながら、手遊びを行つた。しかし、K君はまだお話しや歌に馴染むことができない様子だった。



中学生による紙芝居



酔夢亭読書日記(第16回)

酔夢亭

今流行のブログというものの、新しもの好きの酔夢亭、我もしてみんとて、さっそく始めることにした。

作ってみて感じたのは、ネタの仕入問題である。書くべきものが無い人間が、毎日なにがしか、ものぐるしいおもしろい、日々の出来事や、その他エトセトラをでっち上げていくのは、なかなかつらくも儂いバベルの塔を積みあげているような感じがする。三途の川原で石を積み上げているような、ネガティブな繰り返しを際限なく続けているような、病んだインコや犬が自分の毛を飽くことなくむしり、自己慰安しているような、イヤなイメージが湧いてくる。あーやだやだ。

これが、ヤクルトの古田監督だとか、女優の真鍋かおりだとかだったら、日常を書けば、それだけで記事になり、興味を持つ人々もいるのであるから、これはある意味楽だし、それこそ意味がある。著名人の私生活や、行動、考えていることの中身は、情報として価値があるのだから。

しかし、我らが無名の民、どこの馬の骨とも知れないやからが、自意識をまとわせた駄文を公開することになんの意味があるのか。意味はほとんどない。全くないといつていいと思う。

でも、やることにした。本名を出すこともないし、たかが電脳世界での絵空事だと自分を鼓舞し説得し、つれづれを始めたしだい。

毎日、何を書こうかな、なんて考えて生きていくのも、高等遊民的でなかなかしやれている。

ところで、遊び心というものは、現実を超越する感性から出てくるものでもある。

はてさて、現実にどっぷりつかり、泥にまみれている酔夢亭、そんなことが可能や否や。

2006年4月14日

「こころ」というものが近ごろ無性に不思議に感じられてならないのは、どうしたことでしょう。

人間がいろんなことを考え、感じて生きていることはなにか、それ自体とてつもなく奇跡的なことではないでしょうか。

この「こころ」というものがどこにあるのか？やっぱ「脳」なんでしょうか。

「脳」は、脳の各部位を、日本語、ギリシャ語、

ラテン語、英語、その他の言語によって語源と絡めて脳について勉強する単語集である。

ばらばらめくってみていると、人間がますます不思議になってきます。

「肉単」、「骨単」というものもあって、興味が尽きません。

こりゃ、ほかの単語集もつくってみたくありません。

「タンゴ単」とか。(オヤジだねえ。)

2006年4月17日

ストレスの多い世の中です。

しかし、ストレスに翻弄されて短い人生を過ごすのもつたないというものです。

いろんなストレスがあっても、こちらの主体がそれをはね返すだけの元気があれば、

ストレス自体が生きるうえでの張りに変えることができるかもしれません。

この「元氣」というものを養い、何があっても起こっても、へこたれない、ちよつと

やさつとのことでは引き下がらないぞ、という強い心を持ちたいものです。

この強い心を一体どのようしたら獲得できるか、こ

れを解明していくのも私のこれ

からの人生の目的にしていきたいと思っています。

こんなことを思うのも、自分の心の弱さやいい加減さを痛感しているからです。

2006年4月23日

自己啓発や能力開発の本などをめくっていると、結局、睡眠や食事の取り方はどのようにしたらよいか、迷うことが多い。

健康で気力充実し、脳にもよく栄養をまわすためには諸説あるようです。

超「熟睡短眠」法によれば、睡眠時間は短くできるようです。

貝原益軒もあまり寝るな、昼寝はするな、と書いています。

睡眠時間が3時間で済めば、そりゃ、いろんなことができていいと思うけど、いつも頭がぼーつとしているようでは気分も悪いし、ものの役には立たないでしょう。

今話題のジェームス・スキナー氏はベジタリアンのようですが、脳には必須アミノ酸が必要で肉が必要であるといわれています。このあたりはどうなんでしょう。

本当に、肉や魚などを食べないで、野菜だけ食べて人間は大丈夫なんでしょうか。

先日テレビで、土だけを食べて健康に生きている人のことを放映していましたから、さまざま人がいることは間違いないのでしょうか。

凡人は、いろんな説に振り回されて、ああでもないこうでもないとその時だけ騒いで、結局自分の好きなようにしているわけのようです。

こんなに身近な問題でさえ、すっきりとした答えが出てないことにはなんだか奇妙な感じもします。

という風な「意見、妄想、たわごと」を、酔夢亭はブログ上で実践しているわけである。ブログというものの仕組みもよく分らず、便乗して利用させてもらっている。

ホームページ作成のような面倒もなく、簡単に自分のホームページができ、しかも無料である。多に利用していきたい。

ただ、最初にのべたように、発信すべき中身がなければ、読む価値がない。この辺のこと、この原稿を書いていて、怖く感じている。



『横浜漢点字羽化の会』に

参加してみて

中野志野

私は、2005年夏にこの会に入会しました。

この会の存在を知ったのは、当時データ入力の仕事をしていたので、入力の作業のスキルアップと同時に何か人助けが出来ないかと思い、インターネットを利用して探していたところ、横浜で活動している、『横浜漢点字羽化の会』の活動を知りました。点字というのは平仮名しかないものかと思っていましたが、ホームページを見ると、なんと漢字や記号も点字表示が出来ると知り、感動しました。

それはパソコンでのデータ入力のやり方で漢点字書が作られていくという、私にとって理想的なボランティア活動だったのです。そのころちょうど『漢点字訳ボランティア講座』が横浜で開かれるという事だったので、是非参加したいと思いましたが、平日は仕事をしていたため、日程が合わず講座には参加することが出来ませんでした。

そこで、岡田代表にメールで相談したところ、「月に1度定例会があるので是非そちらにいらして下さい」とのお返事を頂きましたので、参加させて頂きました。

定例会に参加したのは良かったのですが、そのときはこの会についての説明も十分受けていない、漢点字の講座も受講していない私にとっては、何のことを話しているのが全くわからない状態でした。そんなチンプンカンプンなまま私の『横浜漢点字羽化の会』初体験がスタートしたのです。定例会終了後、高橋様にお話をさせて頂いたとき、まずは、課題の入力を見てみてくださいという事になりましたので、頂いた課題を家に帰り、即入力させて頂きました。

入力自体、データ入力の仕事をしていたので、それほど苦にならずにどんどん原稿通りに進めていき、簡単ではありませんがスムーズに課題はクリアすることが出来ました。

次は、本格的な書物の入力です。現代仮名遣いや旧仮名遣いを使用している、文章の理解が難しい書物の入力でした。学生の頃勉強が大嫌いな私にとっては、難題でした。文章のレイアウトや記号の入力については、マニュアルが配布されていましたので、それを見ながらの作業にはなりましたが、講座を受けていない

ためか、半信半疑のままの入力が進む日々が続いています。

分らない事はその都度、高橋様もしくは校正をお願いするほかの会員の皆様に質問し、ひとつひとつ疑問をクリアしていきます。しかし、自分の入力したものがどのような形で漢点字書になっているのかは、見たことがありますので、果たして誰かのお役に立っているのかは分かりませんが、少なからず、お役に立っている事だろうと思いい淡々と入力しています。

この会に参加してもう数ヶ月が経ちますが、仕事をしながらの参加なので、定例会に出る事が難しく、他の会員の方とのコミュニケーションや会では今のようない事が行われているのか理解するのに苦戦している状況です。

どのような形かは分かりませんが、どこかで誰かのお役に立っているのであれば末永くこの会に参加させて頂きたいと思っています。

最後に、私は今年で29歳になりますが、もっと若い世代の方にも参加して頂き、漢点字を広めていければよいのですが、ボランティアに参加するのも少しの勇気が必要です。勇気を持って参加してくださる方が増えるよう、願っています。

ケニアのつよ

水戸市 賀川友吉

「(ジャンボ、おはようございます。」10人の講習生が覚えたばかりの日本語で明るく私たちを迎えてくれた。

ここはナイロビにあるYMCAの建物の一室で、ちようど日本の盲学校の実習室のように、部屋には5台の治療用のベッドと椅子が用意されていた。

私たち4人がはるばる遠い日本からこのケニアに来た目的は、私の所属する団体がジャイカの援助を受けて、ケニアの視覚障害者に日本あんまを教え、これら彼らの職業として普及させるためであった。この事業は昨年の8月から4回実施され、この3月で終了することになる。

講習生たちは女子が8名、男子が2名でいずれも国立盲学校の高等部を卒業した20代の若者だった。彼らは私より背が高く体格もよく、流暢に英語を話し、みな優秀であった。全盲の私には見えなかったが、皮膚

の色は比較的黒く、民族によってその色合いは微妙に違っていたようである。遊牧民であるマサイ族の青年も2名参加していた。

出席をとり、あんまの授業を始めると、選ばされただけあってとても覚えが良く、手の動かし方も上手だった。一人ずつ手を取ってのマンツーマンの指導は、30数年間教鞭を取った私に、盲学校のあんまの実習時間を思い起こさせた。授業中は、「ここ、いい気持ちですか」など、彼らのたどたどしい日本語や、私の片言の英語、そして彼ら同士のスワヒリ語があちこちで聞かれた。講義の内容は、以前日本の盲学校に留学していた2名により、英語に翻訳されて彼らに伝えられた。ケニアでは日常会話はスワヒリ語だが公文書や高等教育は英語が用いられていたからである。

ナイロビは赤道に近い所だが1700メートルの高原にあるので、空気が乾燥してさわやかであり、夏でも心地よい風が私の頬をやさしくなでて行った。講習生は、昼休みや休憩時間には、風通しの良いベランダに集まり、ハーモニカに合わせて合唱したり、歌を歌いながら手のひらを打ち合わせるリズム遊びをして楽しんでいった。私は幼いころの「せっせっせ」という手

遊びを思い出しとても懐かしかった。

2週間の講習会も最終を迎えると、彼らは基礎実習である全身あんま術を一人の落伍者もなくマスターした。私はまとめとして最後にノートを取らせることにした。ところが点字使用者は7名だったのに点字板を持つていたのは3人だけだった。他の生徒は忘れたのではなく、持っていなかったようだ。この点字板を見せてもらったが、これはドイツ製で、プラスチックの30行書きのサイズの大きいものだった。最初は、彼らはこつこつと割合に速く書いていたが、だんだんとスピードが遅くなっていった。後で分かったのだが紙が点字タイプライター用の厚いものだったので、すぐ腕が疲れてしまったのである。日本では大部分の視覚障害者は普通の点字板はもちろん、携帯用のものや点字タイプライターなどを何台も持つており、点字用紙も薄いものから厚いものまで簡単に手に入れることができる。ケニアでの点字用具実情について聞いてみると、盲学校には点字タイプライターは何台も準備されており、一人一人に貸し出され、在学中の使用は特に問題はないとのこと。しかし、卒業するとタイプライターや点字板は高価なので、個人では容易に購入でき

ないのだ。私は改めて日本の充実した盲教育と福祉政策に感謝したのである。

修了証書授与式は日本大使館所有の建物で盛大に行われた。大使からご祝辞をいただき、理事長からは記念品と修了証書が渡された。自分の声が、初めてスピーカーから聞こえたという生徒の謝辞は震えており感動的だった。

授業が終わってから、ある全盲の女性がつぶやいた。「私にはノー マナー、ノー チャンス、ノー ドリーム。」(金がない、機会がない、夢がない)私は、これを聞いて一瞬ことばが出なかった。しばらくして「あなたには若さがあります、可能性に満ちた未来があります、頑張つてね。」と激励したがやはり心は重かった。

帰国にあたって私はみんなにいった。「身につけたあんま技術の練習を続けなさい。まず、家族、友人、周囲の人にしてあげなさい。疲れを取り痛みを和らげてあげなさい。必ず感謝され、報いられます。」と。

私たちが離陸する日は、相変わらず熱帯の太陽はさんさんと輝いていた。ケニア全土を隈なく公平に見守るかのよう。彼らの頑張りにより期待し幸せを祈りつつ空港を後にした。

本会では、今年度の、横浜中央図書館への
納入書として、『白描』（明石海人著）と
『句読点活用辞典』（大類雅敏著）を製作致
しました。ご利用下さい。

歌集『白描』のご紹介

「著者のご遺族の皆様、並びに明石海人顕彰会様には、漢点字訳へのご快諾を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。」

（奥付より）

歌集 白描
著者 明石海人
発行 明石海人顕彰会・編集出版部会
発行日 平成13年6月20日
制作協力 アドミックス／
印刷 大石印刷株式会社 非売品



（本歌集の解説から）

蘇る歌集『白描』

『二十一世紀への遺言』

明石海人研究家・日本大学

岡野久代

今から半世紀以上を遡る昭和十四年、一人のハンセン病患者（差別の歴史を物語る「らい」という呼称を改め、現在では癩菌を発見したノルウェーのアルマウエル・ハンセン博士に因んだこの名称を一般に使用している。）の歌集が空前のベストセラーになりました。改造社から出版された歌集の表題は『白描』はくびょう』、著者は国立癩（らい）療養所「長島愛生園」（岡山県）に収容されたハンセン病の視覚障害による全盲の歌人でした。

当時、『酒ほがひ』の吉井勇や毒舌家で評判の尾山篤二郎の賛辞に加え、評論家河上徹太郎は「何という静寂な世界であろう！恰も眼が潰れたのもっともつと大きな心眼の世界が開けたような世界、肉体は病者でも感覚は通常の人より遙かに健康だといへる世界である。…歌壇のみならず、広く文壇を通じて近來の絶

品である。」と絶賛しました。

明石海人（あかしかいじん）と号する『白描』の著者は本名を野田勝太郎、明治三十四年に現在の沼津市に誕生し、片浜村立片浜尋常小学校（現・沼津市立片浜小学校）から、沼津町立商業学校（現・静岡県立沼津商業高等学校Ⅱ通称沼商）で学びました。沼商時代は端正な容貌の無口な美少年であったようです。大正七年、沼商を卒業すると静岡県静岡師範学校（現・国立静岡大学教育学部）に在学して教員資格を取得し、卒業後は小学校の教師を勤めました。

海人は沼商時代に墨絵を堪能に描いたと言われますが、表題名の『白描』は墨絵のジャンルである「白描画」に由来します。文学作品の表題は著者のセンスや著書の価値を決定する大きな要素ですが、この表題名によって歌集創作の真意を象徴的に表出した海人の芸術感度は卓越しています。（中略）

『白描』は「白描」（短歌五〇二首と長歌七首）と「翳（えい）」（短歌一五四首のみ）の二部構成の作品です。各部に著者のモチーフを語る序文が掲げられ、第一部は必要に応じて短歌に詞書（ことばがき）を寄せていますが、第二部には詞書はありません。第一部「白描」はハンセン病を診断された日から終局ま

での闘病生活を自伝風に綴っているのが特徴です。例えば第一部、第一章「診断の日」の初歌は詞書「病名を癩と聞きつつ暫し己が上ともおぼえず」を添え、「医師の眼の穩（おだ）しきを趁（お）ふ窓の空消え光つつ花の散り交ふ」（歌意Ⅱ医者は癩の診断を隠しているのだろうか。おどおどした眼の動きを恐る恐る伺いながら、不安な気持ちでふと窓の外を見れば、不幸の前触れのように桜の花が光っては消え、散っております。）と診断の前の不気味な時間空間の歌から始まっております。（中略）この様に第一部はハンセン病患者の一生を詞書や長歌を効果的に配置して綴った宛（さなが）ら「短歌で描いた闘病歌物語」です。

さて回想歌をとり入れた第四章の（幾山河（いくやまかは））ですが、これは若山牧水の名歌「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」を示唆していることは、筆者編集の『海人全集』（皓星社・平成五年）に収録した資料に基づく明石海人年譜によって明瞭になりました。沼津千本公園内の歌碑に刻まれたこの歌は、今日では歌人や短歌愛好家のみならず、一般の人々にも沼津の文化的イメージの一つとして定着しておりますが、当時も歌壇会では名代の歌碑であったはずで（中略）

ております。

また四節目の（朝日トーキーニュース）には沼津千本公園の歌碑に刻まれた

ゆくりなく映画にみれば

ふるさとの海に十年のうつろひはなし

（幾山河）の歌碑は牧水没一年後の昭和四年に建立されましたが、ちようどこの時期に海人が帰省を果したのであれば、千本松原を愛し、すでに作歌習得をしていた海人が知らぬ由はないでしょう。しかし海人の日記や随筆には牧水の歌碑に触れた形跡は微塵もありません。縦（よ）しんば牧水の歌碑完成を知って歎心を抱いたとしても、家族や親類縁者に迷惑を及ぼすのを避けるために、出身地を黙秘せざるを得ませんでした。当時のハンセン病に対する社会の偏見差別は一族に及ぶほどに卑劣な現状があつたからでしょう。（中略）

第四章で「かの浦の木槿（もくげ）花咲く母が門（と）を夢ならなくに訪はむ日もがな」（歌意Ⅱ海辺にほど近い生家では今ごろ木槿の花が咲いているだろう。あー。母さんの住む家を訪ねて夢でなくほんとうに会いたいものだ。）と歌っておりませんが、母の住むかの浦とは、疑うべくもなく駿河湾に面した千本浜を指し、願望の終助詞「もがな」と「な」を重ねて強い悲願を表現しております。齢七十に向かう郷里の母にひたすら夢で逢う海人の衷情を思うと悲愴感が漂う歌ですが、母もまた素朴な文面ながらカタカナ書の手紙で、不遇の息子を案じる老母の哀感溢れる書簡を送つ

（歌意Ⅱ療養生活のある日、ニュース映画を見ていると、思いがけず沼津の風景が映っている。懐かしい駿河湾、千本松原。永別の悲しみを抱いて離れた十年前の美しい海と松原はいまでも少しも変わっていないではないか。あー、故郷に帰りたい。）の歌が収録されています。過酷な療養所生活のしばし憩いの時、朝日新聞社による慰問映画に映された郷土の風景は、瀬戸内海に浮かぶ隔絶の島で、極限の闘病生活を送る孤高の詩人をどれほど慰め、あるいは動揺させたに違いありません。（中略）

牧水が県行政の沼津千本松原伐採計画に憤然とし、反対運動に奔走したのは大正十五年、斯くして生命力溢れた立派な根上がりの松と有機的な下草を有する松原は延命し、後に毎日新聞社によって日本新八景の選定を受けました。皮肉にも牧水が自然保護に奮闘した

この年は、海人の身上に非人間的な「ハンセン病の烙印」が押された運命の年でした。それから十年の歲月が流れ、癩療養所の孤独な隔離生活を強いられた海人が、牧水の激しい情熱によって守られた沼津千本松原の映像に詩情を掻き立てられ、朗誦性の優れた望郷歌を誕生させました。牧水歌碑の隣接地に明石海人生誕百年を記念する歌碑が建立されるというのは偶然とは思えない深い縁があります。(中略)

しかし天才歌人の才能は現実のありのままの生活感情を歌うだけでは到底満足できませんでした。海人は『白描』第二部「翳」の中で「刹那をむすぶ永遠、假象をつらぬく真実を覓めて、直感によって現実を透視し、主観によって再構成し、之を短歌形式に表現する」と説明しておりますが、いわゆるポエジー短歌を具現化した第二部「翳」は、第一部「白描」とは章のたて方も歌の性質も異なっています。歌の発表順位なども無視され抽象的な歌が多く収録されました。現実離れた超越的な歌に対して批判をする歌人もおりましたが、「翳」には闇夜に生彩を放つ星のように秀歌が数多くきらめいております。(中略)

この拙文は歌集『白描』の解説として纏めたもので、明石海人略年譜の後に続けて頂くつもりが、『白

描』の導入として、冒頭に収録したいという出版社の強い要請がありましたので、承知した次第です。また漢字の「癩」の使用は、引用文と戦前の療養所の名称に関して当時の状況を表現するためにやもうえず使用いたしました。

歌集「白描」序文

癩は天刑である

加はる答(しもと)の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあ
るひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき搜つて一縷
の光を渴き求めた。

— 深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ
何處にも光はない— さう感じ得たのは病がすでに膏盲
に入つてからであつた。

齡三十を超えて短歌を學び、あらためて己れを見、
人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如
何に美しく、また殿しいかを身をもつて感じ、積年の
苦澁をその一首一首に放射して時には流涕し時には抃
舞しながら、肉身に生きる己れを祝福した。

人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信
じ、明を失つては内にひらく青山白雲をも見た。
癩はまた天啓でもあつた。

診 断

診断の日

病名を癩と聞きつつ
暫しは己が上とも覺えず

醫師の眼の穩（おだ）しきを趁（お）ふ
窓の空消え光りつつ花の散り交ふ

そむけたる醫師の眼をにくみつつ
うべなひ難きこころ昂ぶる

言（こと）もなく昇永水に手を洗ふ
醫師のけはひに眼をあげがたし

看護婦のなぐさめ言も聞きあへぬ

忿（いかり）にも似るこの佞しさを

診断をうべなひがたくまかりつつ

扉に白き把子（ノツプ）をば忌む

行樂の人に群れて上野の山に来つれど
また行くべき方もなく、
人なき處をもとめて博物館の廣庭を
さまよふ

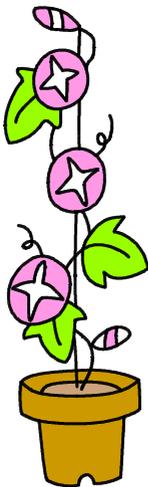
在るまじき命を愛（を）しくうちまもる

噴水（ふきあげ）の水は照り崩れつつ

七寶の太花がめのあをき

肌夕かげりくるしづけさを冷ゆ

* 『句読点活用辞典』は、次号でご紹介します。



蝴蝶之夢

莊子

昔者、莊周夢為蝴蝶。

栩栩然蝴蝶也。自喻適

則志與不周也。俄然覺、

則蘧蘧然周也。

不知周之夢為蝴蝶。

與、蝴蝶之夢為周與。周

之謂物化。此

昔者

栩栩然

適志

蘧蘧然

分區別

物化

昔者、莊周夢に蝴蝶と為る。栩栩然とし

て蝴蝶なり。自ら喻しみて、適えるかな。

周なるを知らざるなり。俄然として覺むれば、

則ち蘧蘧然として周なり。

知らず周の夢に蝴蝶と為れるか、蝴蝶の

夢に周と為れるか。周と蝴蝶とは、則ち

必ず分有らん。此れを之れ物化と謂う。

莊子 戦国時代の宋の莊周の著といわれ、

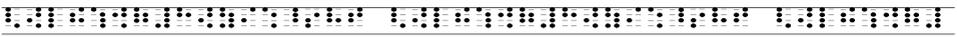
道家の思想が寓言の形で述べられている。

莊周が夢の中で蝶になったのか、蝶が夢の中で莊周になったのか。蝶と莊周は別のものなのに、区別がつかなくなるのは、万物は変化の様相（現象）でしかないからである。

（参照図書）

教科書『古典一漢文編』（第一学習社）

中西清『初歩の漢文』（昇龍堂）



昔者、莊周夢ニ為ル
 蝴 蝶 ト。 栩栩 然 トシテ
 蝴 蝶 也。 自 ラ 喻 シミ 適 ヘル
 志 ニ 与。 不 ル 知 ラ
 周 ナルヲ 也。 俄 然 トシテ 覺 ムレ
 バ、 則 チ 蘧 蘧 然 トシテ 周
 也。

不 知 ラ 周 之 夢 ニ 為 レ
 ル 蝴 蝶 ト 与、 蝴 蝶 之 夢
 ニ 為 レル 周 ト 与。 周 ト
 与 ハ 蝴 蝶、 則 チ 必
 ズ 有 ラン 分 矣。 此 レヲ 之
 レ 謂 フ 物 化 ト。
 ～ 蘧 草冠 / 遽 きよ

※ 蘧（きよ）はJISにない漢字です。初出の段落の後、～以下に字の形と読みを示しました。

ご報告とご案内

一 衆議院議員会館をお訪ねしました。

去る四月二六日（水）、横浜市議会議員の大滝正夫先生（公明党）のご紹介で、衆議院議員の池坊保子先生と古屋範子先生（公明党）を、衆議院議員会館にお訪ね致しました。

古屋先生は横浜市からの選出で、現在総務大臣政務官をお務めです。

池坊先生は大阪府の選出で、活字文化の進行をお仕事の一つとされておられます。

本会から木村多恵子さん、高橋幸子さん、吉田信子さんと岡田が参り、大滝先生がご一緒に下さいました。

触読文字の（点字）、その漢字体系である（漢点字）のご紹介と、漢字の習得の機会がなく、今なお（非識字）の状態にある日本の視覚障害者が置かれている状況と、遅々として進まない（漢点字）の普及についてのお話と、本会の活動のご紹介をさせて頂きました。

先生方には、我が国の視覚障害者は、大半が（非識字）であることは、ご存じなかったご様子で、驚いておられました。また、「触読」についても熱心なご質問を下さいました。お二人の先生方のご厚意溢れる対応に、当方こそ恐縮し、深く感謝申し上げます。

このような機会を設定して下さいました大滝先生のお骨折りに、深く御礼申し上げますとともに、今後もあらゆるところで、視覚障害者の（識字）と（漢点字）の普及についてのお話のできる場をお与えいただけますことを、願って止みません。

二 横浜市中心図書館に、

二タイトルルの漢点字訳書を納入しました。

本誌でもご報告・ご紹介致しておりますように、「大類雅敏編著、『句読点活用辞典』（栄光出版社、一九七九年二月一五日）と、「明石海人著、『歌集白描』（明石海人顕彰会・編集出版部会、平成十三年六月二十日）（非売）の二タイトルを、漢点字訳して、横浜市中央図書館に納入致しました。

全国の図書館・点字図書館から、館間協力によって、貸し出されます。ご精読下さい。

なおこの二タイトルは、読者のご要望にお応えして製作したものです。

三 出版UD研究会セミナーで

前号でもご報告・ご案内申し上げましたように、「出版UD（ユニバーサル・デザイン）研究会」（座長・成松一郎氏）のセミナーで、「〈漢点字〉と、視覚障害者の〈識字〉」を取り上げていただくことになりました。

要領は左の通りです。

出版UD研究会、第十二回セミナー

日時…二〇〇六年八月三十一日

一八…三〇〇二〇…三〇（受付一八…〇〇）

会場…東京しごとセンター5F・第二セミナー室

（JR中央線・各駅停車、東京メトロ・東西線、

飯田橋駅下車）

テーマ…〈漢点字〉と、我が国の視覚障害者の〈識字〉について

講演…岡田健嗣

受講料…五〇〇円

今準備を進めているところです。会員の皆様のお力添えのもと、成功できるよう努力する所存です。

ご質問・お問い合わせは、本会までお願い致します。

四 漢点字講習会の「ご後援

今年度も、去る五月五日を初日として、視覚障害者、並びに漢点字にご関心をお寄せ下さる皆様を対象とした、「漢点字講習会」を開催しております。

昨年度まで横浜市のご後援をいただいで実施して参りましたが、今年度からは、市・教育委員会、市・社会福祉協議会のご後援をいただくことができました。深く感謝申し上げます。

なお今年度から、市のご後援は、「市」ではなく、担当局の「市・健康福祉局」のご後援となりました。未永くよろしくお願い申し上げます。

五 東京漢点字羽化の会が

初めての漢点字訳書を完成しました。

紀田順一郎著『翼のある言葉』（新潮新書、二〇〇四年六月二〇日）の漢点字訳が完成しました。詳しくは次号でご報告致しますが、ここに内容の一部をご紹介致します。

『ラ・ロシュフコー箴言集』

頭のいい馬鹿ほどはた迷惑な馬鹿はいない。

『史記』儒林列伝

正学を務めてもって言え、曲学もって世に阿（おもね）るなかれ。

モンテーニュ『子どもの教育について』

われわれは人生が過ぎてしまってから生き方を教わります。

アナトール・フランス『エピクロスの園』

人生は善いものだったり、人生は悪いものだったりするの、意味のないことである。人生は善いものであると同時に悪いものである、といわなければならない。というのはわれわれが善悪の観念を持つのは人生によってだからである。

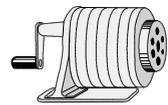
『莊子』

人間世（じんかんせい）人皆有用の用を知って無用の用を知ること莫（な）し。

（こ）希望の方は、お申し出下さい。（こ）

編集後記

今年度の中央図書館への納入書が完成して、発送したのが五月二十六日、ほっとしたところ。今回の製作は『白描』が二巻、『句読点活用辞典』が四巻の、都合六巻で、量的には少量の、いってみれば大変楽な作業でした。しかし、この製本作業、かなり微妙な作業で、なかなか安定した同じ品質の製品に仕上がらないのが悩みの種です。



最初にこういう本格的な糊付け製本を手がけたのが、九年前の『漢字源』全九十巻という、途方もない大物でした。その時から、会員の皆さんにお手伝いをいただきながら作業を進めてきましたが、紙折りと最初の糊付け製本以外の表紙付けなどの仕上げ作業は、大きな失敗をおそれるあまり、どうしても他人任せにできないのが問題です。

（木下）

E-MAIL (岡田健嗣) : eib_okada@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://ukanokai.web.infoseek.co.jp>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は8月15日です。

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。